

障害者福祉援助論

- これから現場に行くあなたに！ -

第4回

リスク と ジリツ

千葉 晃央

一度に複数のチャレンジをする？！

あなたはジリツをしていますか？あなたはこういわれたときにどうこたえるでしょうか？

文字通りに捉えると、ジリツといえば「立位の保持」のこと、もしくは「自立歩行」かもしれません。一般的にはジリツは「人生においての」ジリツをイメージしていることが多いかもしれません。具体的には、原家族からの分離や、生計上の独立を指すことになるでしょうか。細かくいうと、身体的自立、心理的自立、社会関係の自立、経済的自立と整理されています。身の回りのことが自分でできて、精神的にも依存することなく、人間関係や人とのつながりにおいてもうまくいき、なおかつ自分の収入で暮らすことができる…と、なかなかハードルが高いです。それらの自立を通して、人格的自立を目指すともいわれています。

もう一度先ほどの問いです。「あなたはジリツをしていますか？」。このジリツとは具体的にどんな状態なのでしょうか？誰かの助けを得ていることは自立状況ではないとなるのでしょうか。しかし、本当でしょうか？誰からも助けを得ていない生活

状況はあり得るのでしょうか？助けに関しても、何を？どれくらい？誰がそれを決めるのか？というあたりが論点になってきます。

信頼と引き換え？

ケータイの家族割、実家から送られるお米、実家同居の経済負担の軽減など、経済的自立には「お得」という価値観をどう扱うかも大事になってきます。無理はいけない。けれども、金銭的損得勘定に引っ張られすぎると、そのお得な生活デザインを崩す不安からも、結果的に不自由を生むこともあります。人生において、自分のために今何をすべきか考えなるということを人はします。エリクソンの発達段階説でいうならば、青年期は、自分とは何者か、自分は何になりたいのかについて考える時期であり、反対に自分が何者かが分からず悩むこともあります。成人期は、現実的な役割を担い、責任を負う。さらに同性や異性との親密な関係を重要視する。そんな時に、自分がどんなことができるのか、どのあたりに自分の価値がある

と思えるかは中心的なテーマになってきます。できることがあると自信にもなります。しかし、逆をいうとできることが少ない状況があると、自信が持てない、嫌われるのではないか、関わらない方がいいのではないか、自分はいなくても、役に立つことができるのか…など不安になってしまいます。不安は、積極性を失います。また不安だからこそ、傷つく前に、先に周囲を傷つけるということも人はすることがあるようです。また、丁寧にいかかわってもらったり、大切にされたりした経験があると見本にして同じことをできる可能性が高くなりますが、そういう機会がないと行動選択にそのような選択肢を取り入れる機会に恵まれないこともあります。それはその人のせいではないでしょう。そこでは、反面教師にして、どこまで昇華できるかも問われます。

福祉専門職の養成では、必ず自立の概念を学びます。昔からあるのは「自立」と「自律」の違いです。ここでは、自分で自分に関わることを全てできるということを「自立」としていました。他者に自分の代わりにお願いする状況は自立とはいいいません。一方、自らを律し、今自分がどう生きるのかを選択し、自分ですること、他者の助けを得たり、代わりにやってもらう機会を得たりすることを「自らが決めて」利用する、これを「自律」といつてきました。自分の生活を律する、つまり統制・管理できているかという考え方です。

障害という言葉はある側面での症状固定を提議していることになっています。この根拠の中心は医学的判断です。福祉的に、心理・生理・社会的な視点に立つと「症状固定」というのは一面的ですし、刹那的です。永続的ではない姿にもたくさん現場では触れることになります。

そのため、時間的経過による変化の可能性含んだ上で、こういうサービスを使うことでのメリット、デメリットもお伝えする。ご理解をいただいた上で、インフォームドコンセントを行った上での選択をしていただく。自分の生活をどう暮らし

たいかをご自身で選択し、決定することを目指しています。

例えば、靴の紐を自分で結ぶことができるけれども、自分で結び終わるのに両足で30分かかる。支援者にお願いをすれば1分もかからない。このどちらを選ぶかはご本人です。永遠にどちらかの選択だけを選ぶ必要もないです。今はこうする、来週はこうするもあります。支援者が決めるべき最も大事なことは、ご本人の決断を尊重することです。ご本人が決めることに係る情報を理解し、選択し、行動する。

そこに支援者は必要であれば一緒にいて、おすすめや参考情報を伝えます。ただし、過剰な先回りの押し付けは、人生の主人公は誰か？あなた自身は成功ばかりなのか？紆余曲折の経験からも人は作られるのであって、その機会を省きすぎているのか？という懸念も支援者は分かっておかなくはないけません。似たような経験があるから、困っている人の気持ちがわかったり、何かしようと思ったりできます。人生にいろどりを与えるのは明るい色ばかりではありません。支援者が専門的に判断したプランであっても、絶対うまくいくということは人生ではありません。人生は、社会全体から隔絶されたものではなく、自然災害も、パンデミックも、交通事故もむこうから勝手にやってくるのです。

リスクが含まれない選択はない

山田太一のドラマ「男たちの旅路：車輪の一步」（作：NHK、1979年）では車いすで暮らす青年が賃貸物件を探しても契約ができないシーンが描かれています。賃貸物件の契約は最も厳しいという話は現在でも話題になります。特に障害者、高齢者、シングル、外国籍…ということが敬遠されることもしばしばです。そのため、地域の支援者

はその地域で理解を示してくれている不動産屋さんとのつながりを持っています。また、障害者事業所の近隣での集合住宅等を用いた取り組みも積み重ねられてきています。自分の近くにも支援の仕事をしている人がいる、同じような福祉的ケアを必要としている人が身近にいるという方々の協力も大きいです。

いきなりいわゆる「一人暮らし」は同時にいろんなことを突き付けます。時には住宅探し、生計の独立、家計のやりくり、掃除、洗濯など多岐にわたります。どんなことでもそうですが、全体は部分で構成されています。ですので、部分化して一つ、一つとチャレンジしていくこともあります。まずは自分の服の買い物から、ヘアカットに行くなどやりやすいところから始めることもあります。

後は、その時点で、どのくらいをできた！とするかです。みそ汁は煮干しで「だし」を取るところからすることだけがみそ汁ではありません。便利な商品も現代はあります。インスタントも様々助けになります。それをどのくらいで「よし」とするのかも決めなければなりません。

心理学では「リスクテキング」といわれるところです。「リスク」はマイナスやネガティブなイメージで捉えられます。しかし、日常的な多くの選択にも危険は含まれています。車を運転すること、飛行機で出かけること、どこにも（事故などの）リスクはあります。このリスクも含んだ選択とは、利得と損失が混在しています。どのくらいの危機を見越して（リスク）、それを飲み込んだ上で自分はどう行動する（利益を取りにいく）ことを選択するかです。自分の選択も自分の生活をどうデザインしていこうかという時にも、この利得と損失があります。時間がかかっても自分で靴の紐を結ぶと手先も体力もスキルも鍛えられる。でも時間は失ってしまう。それよりは自分の時間を今は優先するというのも1つの選択です。

支援者の関わりは、支援者自身がそれまでどんな人生を歩んできたかも影響します。「食事とはこ

うあるべき」「暮らしとはこうあるべき」など支援者の個人的見解から判断することは禁物です。そのため自分を知ること、つまり自己覚知は支援者がずっと向き合うべきテーマになります。

自立の反対は依存か？

封建社会の頃は、領主に依存することが自立でした。誰かの家来になることで生活ができる。つまり、「依存＝自立」です。続いて、産業革命以降は支援制度などに依存しないことが自立になりました。「依存⇄自立」です。依存は自立ではないからよくないとなりました。依存を克服し、自立を実現することがよしとされました。

依存は克服すべきなのか？また、自立は目指すべきことなのか？というところも考えるべきところです。先述の通り、人はいろんな自立を求められるようになりました。身体的自立、心理的自立、社会関係的自立、経済的自立、人格的自立…。他にも道具的自立、目的的自立も福祉専門職の教科書には登場します。「自立」の文字がたくさん並びます。では、支援者は、世の人びとは自立して生きているのかです。実家からの支援で家を建てる話など持ち出さなくても、なぜ福祉対象者だけ自立を声高にテーマにされるのか？です。そして福祉制度の名称にもあちこちで「自立」という言葉が使われています。支援者の方こそ、いい大学を出るまでしっかり依存した結果その福祉の仕事についていることもあるのです。現代は、様々な自立が目指すサポートがあるのに、それでも自立ができていない人と見られるようになっているという意見もあります。では、あなたは自立できているのだろうか？世の人の多くが自立して生きているのだろうか。その問いをしながら謙虚に目の前の方に向き合うことが必要です。

自立とは依存先を増やすこと

様々なものに依存をして人は生きる。熊谷晋一郎氏（東京大学）は、その依存先がたくさんある状態が自立ではないか？としました。そして、依存先が少ない状況が自立とは異なる状況（いわゆる依存状況）ではないかと指摘しています。どこにでも行くことができ、なんでも買える人は依存先が多く、複数の関係性があるからこそ、依存が少量分散し、偏った依存がない。その結果の自立ではないかと。その逆の状況、つまり依存先が少ないと、依存先一か所の依存が大きくなる。そこでの依存が不調になると、いきなり大きく関係性を失います。となると、少ない依存先を失う不安も起こるし、従属的にもならざるを得ないことも起こります。また、少ない依存先との関係が不調になるとその人のトータルとしての不調に直結します。健常者の依存先が多く、障害があると利用できる依存先も少なくなってしまう状況が社会的に、現実的にあるのではないかという視点です。

社会との接点

つまり、多くのところに繋がっていることが助けになるときがあります。人はうまくいかないことをゼロにはできません。何もかもうまくいくことはないし、絶対にうまくいく方法也没有ありません。それよりも、うまくいかない場面をどう迎えるかです。いろんなところとつながっているといろんな自分が存在します。職場の自分、家族の中の自分だけでなく、地域活動での自分、学生としての自分、ギター教室での生徒としての自分…。家庭と仕事だけだと、どちらかでうまくいかないことがあれば、自分の半分が否定された気持ちにもな

ります。しかし、いろんなところに関わっていると、そんなに同時に何か所も嫌なことは起こりにくいです。自分の半分以上を否定ではなく、一部分に「×」があるだけなのです。むしろ複数あるので、一方で良いことも起こったりもします。たくさんのワタシがあれば、いいこともたくさん増えるチャンスがあります。複数のところに関わることは、忙しいですが結果的に自分の安定を導くことにもなります。

コロナにおいて、様々な（依存できる）機会が減りました。誰もが不安を抱えやすくなり、変化や工夫がノルマのような時代の節目です。そんな中で依存先を増やすためにはICTも一つの手段です。ICTも慣れると皆さん重宝されています。移動の負担（安全面他）と移動による筋力への負荷等のバランスをどうとるか？そんなリスクテキングのテーマも今日的で

参考文献：「最新 社会福祉士養成講座 精神保健福祉士養成講座4 社会福祉の原理と政策」一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 中央法規 2021

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

対人援助学マガジン 43 号／2020 年 12 月～

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42 号／2020 年 6 月～2020 年 9 月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16 号／2014 年 3 月

「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」

対人援助学マガジン 6 号／2011 年 9 月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1 号～40 号／2010 年 6 月～2020 年 3 月